



Shadowing 2

私がスウェーデンのマルメオペラハウスに到着した日の夜に、初めてオーケストラと、コーラス、ダンサー全員が揃ったテクニカルリハーサルが行われました。照明家のガイ・ホア氏と、劇場プログラマーは、このテクニカルリハーサルのために、数日前からGrandMAで打ち込みをしていたので、その打ち込んだものが、実際にステージで見られる初めての機会でした。

この公演の1幕目(前半)は、教会中を想像させる、コンクリート(のような)壁に囲まれたセットで、上手の壁に、大きな窓が3つ並んでいます。ガイ氏は、この窓に障子のような厚いフロストを貼り付け、そこにL205など暖色系の色を使ったパーカンや、JB AA LEDを当て、自然光のようなソフトライトを、室内に照らし出していました。そのソフトサイドライトが、1幕のステージで使われる、メインの灯りであり、その色と光量加減で、時間の経過を表現していました。ガイ氏と演出家(兼、振付家)は、このプロジェクトの案について、2年前から話し合っていて、1幕目は窓からのソフトライトでいくということは、コンセプトとして決まっていたそうです。

しかし、テクリハの第一セッションが終わった直後、ディレクターが顔を青くして、ガイ氏のところへ歩み寄ってきました。「ガイ、私はあなたと10年近

く一緒にやってきて、一度もこんなことを言ったことがないが、今回の1幕の照明は、照明としてファンクションしていない。全体的に美しいのだが、ダンサーが風景と同化してしまって、すべてがぼやけて見える、ダンサーの動きに集中できないんだ。このままじゃ、だめだ!なんとかできないだろうか?」と、切羽詰まった様子で、ガイ氏に問いかけてきたのです。公演オープンまで、あと1週間。私はハラハラしながら、この会話を隣で聞いていました。『照明のコンセプト(ソフトライト)を今になって全部変えるの?!そんな時間はないでしょう。ガイ氏、どうするのだろうか。』と思いました。

そしてガイ氏は、ショックやストレスという表情を全く見せず、こうおっしゃられました。「あなたの言っていることは、わかりました。今の状況で、できることは3つあります。(上手の)サイドライトはすでに(光量が)フルですが、もう少しパンチを効かすためには、ほぼすべてのパーカンの色を抜くことでしょうか。または、上手の窓のフロストを取り外してしまうことです。フロストを外してしまうと、背景に多方向からの影が散らばってしまうので、できれば、このオプションは避けたいです。もう1つできることは、トップの地明かりで使っているJB A12(LED moving wash)のフォーカスを変えて、パイプエンド(斜め打ち)として使うこと。これによって、ダンサーの輪郭がもう少し引き立つはずですよ。これらの修正をするためには、最低2時間

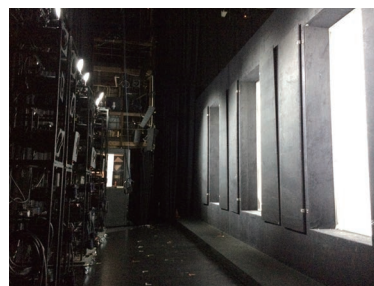
はいただきたいです。』私は聞いていて、『なんて大胆な変更だろう、2時間で終わるのかしら』と心配になって聞いていました。ガイ氏の、落ち着いて、解決案と計画を明確に、淡々と演出家に説明する様には、プロフェッショナルとして本当に尊敬いたします。演出家との会談の後で、ガイ氏は「ベン(演出家)は、たまにナーバスになってあのようにパニックを起こすが、今日、話し合ったことは絶望的ではない。解決可能だし、大丈夫だ。」と、柔らかな表情でおっしゃっていました。

彼のような、経験豊富な照明家は、とても柔軟性がある、現実味のある解決策が、サクッと優先順位とともにリストとして頭に浮かび、クリアに人に伝えることができるから、信頼され、尊敬されるのだなと実感しました。照明の技術的なスキルと同等に、People's skill(人との接し方)は、プロダクションで働くうえで、とても大事なスキルだとも、しみじみ感じました。

次の日の朝、ほとんどのパーカンから色を抜き、窓のフロストはそのまま、1幕すべての光量の再調整とMovingのリフォーカスを2~3時間でされました。ガイ氏と、劇場プログラマーの間には、互いに気の効かせ合いとおもひやり、よい信頼関係が築かれていたお陰で、再調整はスムーズに、的確に行われ、午後のテクニカルリハーサルには、なんとか間に合いました。とりあえず1幕は、ほっと一息。来月号も引き続き、ガイ氏のシャドウレポートを書かせていただきたいと思います。



1幕目の舞台と窓からのソフトライト(色を抜く前)



ソフトライトの窓の裏側

今年も照明家協会のエッセイを掲載させていただいたこと、そして懲りずにお付き合いくださった皆様に、感謝の意を表します。来年も宜しくお願い致します!どうぞ良いお年をお迎えください。